


 書評

加藤 敏 著

統合失調症の語りと傾聴

EBMからNBMへ

八木剛平

本書は著者が統合失調症を主題として論じた著作の2冊目である。前著「分裂病の構造力動論—統合的治療に向けて」(1999)は統合失調症の病態をいかに理解するかに力点を置いたいわば理論篇であったが、本書はこれに続く統合失調症治療の実践篇といえる。著者はそれを次のようにまとめている。

第I部 語りと傾聴

第1章 ナラティブ・ベイスト・メディスン(NBM)としての精神医学

第2章 統合失調症における語りと傾聴

第3章 行為遂行的発言としての病名告知

第II部 病態把握と慢性化防止

第4章 統合失調症患者における状況への関わり—裂開相と内閉相

第5章 統合失調症の慢性化防止のための予備的考察

第6章 精神病理学からみたりハビリテーション—SSTに注目して

第III部 精神障害の新たな分類に向けて

第7章 クレペリンにおける早発性痴呆の創出過程

第8章 生物学的精神医学と精神病理学の架橋の試み

これら一連の論文が書かれた背景には、EBMを金科玉条とする風潮、精神分裂病の呼称変更やDSMの作成における精神医学史的吟味の不足、生物学的単純化の傾向があった。著者は、このようなアメリカ主導のグローバリゼーションの波の中で、あえてクレペリンとグリーンガーの教科書を読み直し、あるいはメルロ＝ポンティの概念に着想を得て、NBMが究

極的には精神科臨床にとってのアルファであり、オメガであることを説き、統合失調症概念の「脱疾患単位化」を模索する必要を論じている。

著者は最終章で、隆盛を極める生物学研究と、その蔭で危機が叫ばれて久しい精神病理学との架橋を試みる。すなわち生物学的次元の記述は、そもそも精神病理学による言語レベルの記述的エビデンスに引き続いて「重ね書き」されつつあるもので、その物的エビデンスは症状と臨床単位の記述があってはじめて意味を持つ。しかも生物学的記述はもとより、精神病理学の記述もまた(改訂を続けるDSMのように)「絶えず生成の中にある」。相互の知見はまだあまり比較対照されていないが、著者は生物学的知見、とくに薬物療法の経験を視野に入れて、「精神障害を捉える基本的視座と新たなスペクトラム」概念を提出した。それはクレペリンにさかのぼってDSMを脱構築する画期的な試みであり、また(かつての恩師の苦言を脳裏に)治療的視点から精神病理学を再構築する試みとも思われる。

カバー写真に用いられている古代ギリシャ(紀元前4世紀)の医療を描いたレリーフは、歴史に学びつつ未来を志向する著者の姿勢の象徴であろう。「あとがき」では「臨床の真の師」である患者への謝辞が述べられている。これは臨床医学の正道を歩んでいる人のまさに真情なのである。

(翠星ヒーリングセンター)

●A5 248頁 2005 定価3,780円(本体3,600円+税) 金剛出版